木山捷平

酔いざめ日記

講談社

酔いざめ日記
昭和五十年八月二十日　第一刷発行

著　者　木山捷平

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一二二　電話東京(三九四五)一二一一　振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場
©木山みさを　一九七五年／落丁本・乱丁本はおとりかえいたします　Printed in Japan
定価は箱に表示してあります（文1）

酔いざめ日記

題字　山田養鶩

原文は昭和三十三年前後まで旧かな遣い・旧字体で書かれているが、今回刊行するにあたり、引用文、作品名等、特殊の場合以外は、編者の諒承を得てすべて新かな遣い・新字体にあらためた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

昭和七年

一月一日、金。
捷平二十九歳。みさを二十五歳。大久保百人町三五三番地迎年。ゆうべ草野のやきとり屋でやきとりを食っていると、十二時となる。遊廓をあるいて、ラジオで善光寺の除夜の鐘をきく。金田館にて福士、新井、佐久間と麻雀をやる。夜雨、林静夫来り酒をのむ。静岡にいる恋人の話に夢中なり。夜、佐々木金之助氏を高円寺に訪ねる。みさをは初めて佐々木氏に会う。帰途、道がぬかるみ靴がすべりかんしゃくおきる。
一月二日、土。
初風呂。夜新宿に出る。みさをの土産にあまぐり二十銭を買う。よろこぶことしきりなり。夜目がさめたら、部屋の中に何やらもえているものあり。あわてて、ふとんにつきし火に水をぶっかける。卓上電燈の電球が、フトンに引火したものらし。眼鏡のロイドもえてしまう。
一月三日、日。
朝、さっそく近所の眼鏡屋に行ってめがねの縁を買う。一円三十銭のものを七十銭にまけて貰う。
『おしのに送る手紙』を書き終る。郵便局が三時迄で、吉野君のところへとどけることを得ず。関沢君、腕を首にぶら下げて来る。夜後藤興善の招待により出かける。小田、杉本、テル岡の先客あり。
一月六日、水。
詩集（メクラとチンバ外）を五冊かかえて例の柏木の古本屋へ行ったが留守。途中交番の黒板に「男子迷子、当四歳」とかかれてあり。のぞくと中に額にバンソーコーをはったかわゆき子供一人、玩具を持ちてあそびいたり。百人町の古本屋にて三十銭で買ってもらう。「秋葉喬」の詩集の批評、三枚をかく。竹下絃之介来訪。朝早く、福田武寿なる男詩集を買いに来る。みさをの母より「ハバ」を薬袋にいれて送り来る。
一月八日、金。
朝風呂にゆきひげをそる。午後三時すぎ、農林省営林局に倉橋を訪ね不在。内務省に佐伯を訪ねる。今日観兵式還幸の鹵簿に爆弾を投げし男あり。場所は警視庁前の由。内務省大さわぎなり。巡査が号外、新聞を没収しつつ街をあゆめり。犯人李奉昌。
夜、倉橋宅で草野、長田にあい、後二人でダンスホール日米に行き二十分ばかり見物。はじめてなり。二人で銀座をあるき、新橋駅前「おとくさん」でおでんをくらいて別れたり。
二月六日、土。
津田君を市衛生試験所に訪い、注射一本。（二月一日より）帰宅したら机上に「料理はにこみ。酢のもの二つ。ほ

し魚は焼いて下さい」と書いてあった。みさを今日「ミリオ」に行った。一時ごろ帰る。今夜より寒さはげしくなる。寒くてたまらない由。月船夫人のコートを借りて着て帰る。去年より約束のコートまだ買えず。自分で古い着物をコートに直しているが、どうも暖かそうでない。

二月十日、水。

朝、二寸の雪つもる。さむさようやくはげし。昨夜演説会場にて前蔵相井上準之助兇漢のため射撃さる。本郷駒込小学校通用門前で犯人小沼正。

津田君訪問。注射一本。サンタコール一瓶もらって帰る。夜みさを家庭教師正山氏に行く。帰宅して嘔吐。

三月一日、火。

満州新国家本日生る。長田宅「ノンシャラン」へ行き、赤ん坊を見る。どうもこの家庭は小生の心にぴったりせぬものあり。夫人と藤木宅「ル・ネ」に行く。

兵隊が戦争に出る。電車で東中野を通るのを見送った。

野長瀬を訪問。浅海君来訪。倉橋夫婦十二時すぎまで話し込む。

三月二十九日、火。

二ヵ年間住みなれし大久保百人町三五三番地長山の四・五の部屋より阿佐ケ谷三九二「サクラアパート」に移る。農大実科受験の為上京中の籟も手伝う。間代十三円。ガス水道付台所、四・五、三、二の部屋。引越すときみさをの態度わるしと撲る。

四月二十日、水。

清瀬保二氏作曲発表会。於日本青年会館。午後七時より。「メクラとチンバ」発表。照井詠三バリトン歌手。アンコール三回。あとで清瀬氏と作歌者、歌手と記念写真をとる。みさをは一人で帰宅した。

五月七日、土。

阿佐ケ谷「サクラアパート」を引払い杉並町馬橋四四〇番地に移る。家賃十五円。六、四・五、二・五の部屋、ガス、内井戸付、スレート葺一戸建。倉橋弥一、草野心平の助力あり。中央線阿佐ケ谷と高円寺駅の中間、汽車、電車の豪音すさまじき家と気付く。

六月三日、金。

大正十一年より十三年迄百姓、小学校教師たりしも用をなさず。

大正十四年上京。十月、赤松月船、佐藤八郎、大木篤夫、村田春海、吉田一穂、草野心平、大鹿卓、黄瀛と共に『朝』を創刊。

昭和三年四月、詩話会に反抗して同志と「全詩人連合」をつくる。

昭和四年五月詩集『野』を出版。

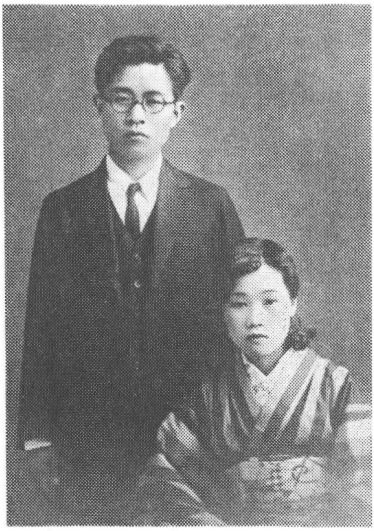
昭和六年六月詩集『メクラとチンバ』出版。

（求めに応じてまとめた略年譜の控え）

七月六日、水。

夕刊掲載。共産党事件求刑（新聞切抜、「朝日」「読売」夕刊）三田村四郎死刑、市川正一、鍋山貞親、佐野学は無期懲役。徳田球一懲役十年。等々、連座百九十九名。現下

の情勢に鑑み厳罰を以って臨む。平田検事の論告態度。
又、満州国承認に反対。（調査団の有力委員）我当局は断然拒絶を決意す――とある。
七月九日、土。
過日大森に於て不慮の死を遂げたる石川善助君の告別式、東大久保専念寺で行わる。高村光太郎、尾崎喜八、赤松月船、吉田一穂、福士幸次郎、金子光晴、会するもの数十名。善助君の厳父令弟粗末なる様子人の良き顔しているのが哀れなりけり。帰途新宿エルテルにて日野、森、塩野、江口、小野十三郎等とコーヒーをのむ。
八月二日、火。
倉橋、日野両君は鎌倉、静岡、名古屋を経て関西旅行に勇みて出掛けた。


結婚後最初の写真（7年5月15日）

「読売新聞」紙上に「別荘座談会」が今日より始まった。大宅壮一、中条百合子、山田清三郎、細田民樹、林房雄各氏。面白いというてはならぬ記事である。
八月十日、水。
昨夜〇時四十五分特急桜にて下関着八時三十分。みさを出迎う。みさを七月二十三日帰郷していた。駅で下車間際、移動警察のスパイの取調をうく、不愉快至極なり。駅前にて朝食。川棚温泉に遊ぶ。七品料理、海の魚のうまいこと。内湯。夜十時六分古市着。三郎、母、出迎える月明るし、夕食、西瓜をたべてねる。石地蔵去年のままなり。
八月十二日、金。
宮崎家にて隣近所、親類を招きて客をなす。みさをの出立の客振舞をなさざりければそのつもりなり。十二、三名の客来り、紹の羽織などつけて、客の中にいでしが、キュークツなりけり。夜この地方の行事御田頭という提灯行列を見たり。お宮にてくるくるみこしを廻す烈しい青年達であった。
八月十五日、月。
萩見物。朝七時半出発。余は浴衣、妻はコバルトブルーの洋装。玉江下車。徒歩にて菊ヶ浜に行く。阿武川の水清く町の到る所近海の蟹匍ばえり。志津岐神社に到る。昔の士族屋敷今は美しき夏橙畠となれる道を毛利家天樹院に詣で、田中義一銅像の下を通り、高杉晋作旧宅、木戸孝允旧宅を見る。守番の女の説明により、孝允の生れし間、風呂、居間、抜穴など面白し。この家は市制の敷かれる前ま

で、明倫校長の寓たりし由。野山の獄、岩倉獄を見てバスにて越ヶ浜水族館に到り池畔にて昼食。（五十銭）それより松陰神社に到る、松陰生誕の家、幽閉の間を見る。伊藤博文旧宅に到る、萩焼店にて杯五個を求む。夜十時帰宅。

八月十七日、水。

宝塚行。昨夜芦屋の佐々木金之助邸に泊って朝、佐々木みなとを連れ妻と三人で見物。長柄の橋。太刀ぬすびと。ブーケーダムール、動物園を見る。風呂（夫婦風呂）に三人入浴。夕方芦屋に帰る。佐々木泊。

八月十九日、金。

昨夕城崎温泉着。しなの屋投宿。城の崎の湯の女のやさしさ。湯水をのむのも又楽し。家族風呂（六十銭）。みさを歯を病みてアスピリンを求む。朝風呂に入る。

出石着。みさをは芦屋に帰し夜東京に帰る予定。江原より出石鉄道にのる。カフェーが三つも出来ていた。中非に投宿。おさっちゃんを見舞う、年をとりて頭はげて気力なし。十年前と男に変りなし。白岩公一君よき父となりたり。野村家訪問。子供文代、千代、松代みな大きくなり居る。女学校を見に谷山に行く。橋本五男氏に逢いビールなどの御馳走にあずかる。これは意外なりき。雨ふり出す。小学校によって見る。天井低き職員室。今井綾子氏首にほうたいをして昔のままよき女。中井庫一の墓に参る。夜池田光俊氏を訪い白岩と三人で夜ふけまで語りたり。うれしき町なり。なつかしき町の人情なり。野村一雄君、余にあいたさに銀行よりかえり来る。幼稚園に行き、福富、宮下、大友、今井、その他知らぬ男先生に逢いて会談これ久しゅうす。五時汽車にのりて芦屋佐々木邸にかえる。雨にぬれる。

八月二十八日、日。

久しぶりに帰京。足、腰、神経痛が出て、高円寺駅よりちんばをひきひき帰宅。

九月十六日、金。

満州国承認号外（「東京日日新聞」――十五日付）。日満議定書全文並に帝国政府声明書。斎藤首相談、荒木陸相談、武藤全権談。満州国国務総理鄭孝胥談あり。

九月二十日、火。

神経痛に苦しむ。今日より坐骨神経痛の灸を始める。逐次数を増すことにする。夜深更灸点6×22―132。腰に六点。みさを、もぐさの火をおとしたりして熱くやり切れない。

十月一日、土。

大逆犯李奉昌に死刑の判決下る。今朝大審院法廷で。桜田門外大逆事件の犯人李奉昌（日本名浅山昌一）三十二歳は三十日午前九時十五分大審院刑事一号の大法廷において和仁裁判長より刑法七十三条により左の如く断罪死刑の宣告を言い渡された、云々。困窮、自暴自棄の末、民族的邪推に陥る。上海で燭激な煽動を受く、云々。坐骨神経痛灸6×50―300。

十一月四日、金。

赤松月船訪問。小説の原稿を見て貰う。『出石城崎』。

改造社へ原稿を持って行き、まだ受付けるというのでなおそうと思い持ち帰る。阪中正夫訪問。灸6×25—150。

十一月十日、木。

赤松月船氏訪問。不在。昨夜書き上げた原稿一〇七枚を見てもらうつもりで行ったが。帰りに蔵原伸二郎を訪い、一緒に彼の貸家探しをした。梅田寛の隣のうち（十七円）六、四半、四、二の家に決す。かえりにうちにより、蔵原君が酒二合おごってくれる。灸6×17—102。

十一月十五日、火。

昨夜嵐雨あがり晴天となる。昨夜の風雨は十三年振りの由。方々に浸水、破壊の家屋多し。前の途に水たまり道悪し。野長瀬来訪。『土の血統』をよみ感心してくれる。午後有楽町に津田君訪問。左奥の入歯をした。森、栗木君を実業ビルに訪問。神田杏雲堂病院に佐々木俊郎氏を訪問。野長瀬と会す。三省堂にて長田、山本、倉橋と出逢う。神田日活にて野長瀬と活動を見る。一瀬直行より病気快気内祝としてフクサ送り来る。灸6×15—90。

十一月十九日、土。

昨朝初雪ちらりとふりて三十三年ぶりの早い雪あり。今朝は霜柱たつ。十時起出て新聞をよみながら日向ぼこ。裸になりて日光浴。町に出て竹下と逢い、早慶戦のラジオをきく。高円寺の古道具屋で萩焼（高麗左衛門）の茶器を求む、七十銭。古本屋にて『人及び芸術家としてのトルストイ及びドストエフスキー』五十銭を求む。灸6×25—150。

十一月二十日、日。

夫婦共十一時起床。ユタンポ冷えていたり。うすぐもり。竹下君来訪。一時半より早慶戦のラジオをきく。二対一早稲田の勝。村井武生来訪。共に野長瀬君をホタルアパートに訪う、留守。帰りて夕食を共にす。このごろ読書、執筆共になさず。左の目二重瞼となりて気持悪し。夜みさをの歯金冠二分五厘を一円五十銭で高円寺の時計屋にうりたり。薬罐もりはじめたり。灸6×35—210。深更終了。

十一月二十一日、月。

午頃翠洋荘に日野春助君を訪う。ねていたり。金五円の催促を言わで帰る。小学館に吉田氏を栗木幸次郎君の紹介状をもちて行く。校了にて忙しくて逢えず。農林省に山本和市君訪問。衛生試験所に津田君を訪問。歯の治療完了。同君の帳面を見ると、九月三十日以後十四、五回来たことになっているが、事実はもう少し沢山来ているらし。前歯二本金と奥に二本合金をいれた。彼氏肺を悪くして帰郷するとて、レントゲンなど見せらる。栗木君をアスラム社に訪い、ブラジレイロでコーヒーをのむ。倉橋に逢うつもりであったが彼帰宅後、山本君と東京駅よりのり、新宿の酒の家にて酒二本のみてわかる。夜蔵原伸二郎氏を訪い小説を置いてくる。佐々木氏にもらったユタンポもり初めた。灸6×15—90。

「読売新聞」号外。帝国政府意見書「満洲国承認」を振り翳し堂々連盟の牙城に肉薄。リットン報告書は故意に事実を枉ぐ。（九月十八日事件及新国家に関し証拠の取捨十分ならず）外務省公表要領書全文発表あり。わが代表部首席

代表松岡洋右氏他、写真にて大写見出あり。
十一月三十日、水。
晴天なり朝裸体となりて日和ぼこ。太陽が南に傾いたので日あたりが悪くなった。午後蔵原伸二郎訪問。この間見て貰った小説の批評をうく。佳作。からくつけて八十点。まん中があまりに詩的になっている由。加藤さんと三人でツリに出かける。(小生は棹は持たず)タナゴが六、七疋つれた。夜野長瀬正夫来訪、夕食を共にす。『若き女教師』を借りて行く。夜、神戸君訪問。ヌーベルの原稿十五日頃まで書くことにする。和堂へより小林秀雄『文学評論』を一円で買う。帰ってみると、みさを胸が痛いとねていた。もんでやる。蔵原氏からおもと提げて帰る。小米ざくらの返り花さいていた。まだ紅葉が少し遅いがさかりであった。灸6×21—126。深夜終る。
十二月二日、金。
昨日みてもらった宮崎孝政の運勢、何となく気がかりなり。たいしてあたったとは思えないが、十二月十日に西南の方向へ引越せといった。こせなければ土を取って来て床下にいれよという。こんなものを見てもらうものに非ず。野長瀬来訪。何の話もなし。夜蔵原の持って来て置いてある酒をのもうとて、彼を迎えに行きしが、中谷孝雄氏が来ていて、小生そのまま長居してしまった。陶器の話、硯の話、土器の話、文学の話、——十二時をすぎて辞す。中谷氏はコールテンの洋服を着けていたり。右足の田虫かゆし、ヨーチンを塗る。留守に大木実来訪。『北緯五十度詩集』、『断片』を持ち帰りし由。灸6×15—90。深夜。
十二月六日、火。
みさを宛に母より手紙来る。いろいろぐちが書いてある由。好きにつけ悪しきにつけ、いたくこの頃の生活と思いあわして淋し。夕飯のとき、飯台を彼女に都合のよいように引っ張ったので、それがぐっと癪に来て、茶ダンスのガラスを一枚割ってしまった。茶碗を投げてしまった。妻がガラスの破片の掃除をしながら泣くのを見ながら、己自らがたえられぬ佗しさであった。雑誌少しよむ。「少女クラブ」市川孝氏より原稿返送さる。『愛国の歌』。昼小雨、夜、雨の音ちょろちょろときこゆ。灸6×15—90。深更となる。
十二月二十六日、月。
小説三十四枚。寒さとてもましたり。午後、ひょっこり鳳君修学旅行の序にと立ち寄る。大きくなりて(一昨年の夏より逢わず)髪など左分けせり。余より背丈高くなりたり。みさをとは初対面なり。火鉢にあたりて四方山の話をなす。夕方野長瀬来訪。原稿紙とリプトン紅茶少々持ち帰る。鳳は青年会館にカバンをとりに行き、やっと帰りて、夜ふくるまで話して寝つけり。今日帰るというのをひきとめしなり。灸6×12—126。
十二月二十七日、火。
小雨あり。朝十時鳳と食事をなし浅草に出掛ける。新宿より上野迄省線、上野より地下鉄、浅草に到り観音様に参り、富士館にて「一本杉」「時代の麟児」を見る。面白く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

もなし。鳳も居ねむりなどなしたり。円タクで新宿迄五十銭。六時帰宅。夕食、酒を少し二合ずつのむ。彼なかなか行ける。酒をのみてみさをのことお姉さんと呼び居たり。土産（父シャツ230、籟シャツ100。桃郎手袋33。母に毛糸腰巻140。鳳靴下36。月毛靴下。他にゴロナ）を買い持ちかえらす。東京駅まで送りて行く。急いだので九時四十分下関行にのるのに、三十五分の大阪行にのせてしまう。大失敗の巻。どうして帰るかと心配。二人で銀座に出て十二時半帰宅。灸休む。

十二月三十一日、土。

晴。昼在宅。妻は大掃除をやっていた。夕方から二人で出る。三越へ商品券で火鉢を買いに行ったが、六時迄で間に合わず。銀座の雑沓をおしあいへしあい歩く。博文館日記と「作品」一月号を買う。新宿へ帰って少し歩いたが、今日は誰にもあわず。ラジオで除夜の鐘をきく。高円寺で餅を半枚二十五銭をもとめる。高円寺の町で自転車がひっくりかかって、右の足の上に箱の荷がおちて、少しいたむ。かえってヨーチンを塗る。灸6×11—66。

昭和八年

一月一日、日、晴暖。

東京市杉並区馬橋四の四四〇にて新春を迎う。我輩三十、みさを二十六、父五十五、母五十三、鳳二十二、籟十九、月十七、桃郎十五。

いよいよ三十となったが立てもせず。失業中。文学がやり通せるか。又ツトメを心がけようかと考える。一日中炬燵でねてくらした。誰も来もせず。古木鉄太郎（作品）『ある日の散歩』をよむ。賀状二十四枚出す。四、五枚小生宛賀状来る。

一月七日、晴。

朝新聞の広告を見ていて急にやって見る気になって求職に出かけた。

①銀座新聞之新聞社。履歴書を出して試験を一人ずつうけるのだ。

一、リットン報告書とは何か

二、東京の新聞社七、地方十三（有力なもの）

三、有力雑誌社十

四、大言海の著者及び

五、新聞之新聞とは何をする所か

②夕刊帝国（やはり銀座）に行ったら営業だけというのですぐ辞去。またたく間に五、六人来ていた。
帰途、倉橋君のところにより不在。田中令三のところにより本を三冊かりて帰る。賀状五枚出す。十枚来る。
一月十日、火、晴後曇。
朝、日和ぼこ。井伏氏の賀状、阪中氏、松原氏の転居通知来る。
蔵原氏来り、（質草の靴持てれど今日休日なりと気付きたりとぞ）煙草なきかという。なし。新聞、紙、びんをうりて三十五銭得。すなわち煙草かいてのむ。つれだちて高円寺の古道具屋あるきたり。みさを今日口頭試問を受けた。夜小説二十三枚、二時までがんばる。賀状四枚出。一枚受く。
一月十八日、水、晴。
朝暖かき日なたにて日なたぼこしてありしに古木さん来る。久しぶりなり。書きさらしの小説五十枚ばかり読んでくれる。「陽があたったような暖い作」と評さる。竹下君来る、長居なのでしまいに憂ウツになる。さむさ夕となりてはげし。夜三時迄かかって小説書きあげる。（時雨、五十四枚）こわれていた火鉢のワレ目を妻が紙ではったら又当分つかえるようになった。賀状一枚来る。
十・三〇事件（共産党）の号外出る。
新生共産党大検挙（本日記事解禁）大森川崎第百銀行支店ギャングから端緒、党主脳部を根こそぎ、検挙総数実に一千五百名。全国警察網の大活躍。熱海事件（七年十月三十日）早暁貸別荘に突入十一名全部捕縛。理論的指導者河上肇博士（一月十二日）シンパ大塚金之助商大教授（一月十日）等々。
一月二十七日、金、寒さきびし。
朝起きたばかりの所へ、那須、今野両君来る。竹下も来り対談。竹下は『源義経』を完成して持ち来る。三時ごろ昼食。両人をおっかけて塩月君神戸君宅へ行く。去りし後。神戸君「海豹」という雑誌をやるという。小生は同人費がなかろうから入会を遠慮していたという。那須君邸にてマージャンをやる。今野君のところへ行き酒一本よばれて、トランプをなし十二時帰宅。さむし。灸を休む。
一月三十日、月。
家でもありはせぬかと阿佐ヶ谷方に出かけて野長瀬君訪問。『女教師三人組』という「サンデー毎日」の懸賞に出した大衆文芸をよんできかされる。なかなかうまし。道で井伏氏に出あい、カフェー三軒ばかり歩き、コーヒー、ビール、ウイスキー、三、四円おごってもらう。なかなか愉快な一晩がすぎてしまう。夜ふけて野長瀬来り、小生の『出石』をよむ、三時ごろ帰りたり。鑛より写真二枚同封、おやじが農大に入れといい来る。太田垣敏雄より上京するから宿たのむと言い来る。女房は頭いたしとてねていたり。灸休む。
二月二日、木、晴。
朝ひなたぼこしていたら塩月君来り、ともないて那須辰造君を昨日の約束どおり訪問。雑談二、三時間。同君の部

屋はあたたかなり。経多君かわゆらし。草餅などいただく。帰りに神戸君のところへよりしが人の来れるあり、直ちに辞去す。夜『出石』を書き改めにかかる。入浴、久しぶり。石井直一氏釈放。

血盟暗殺団予審終結の号外出る。兇暴！　一人一殺主義、大立物二十氏を狙う。一味十四名全部公判へ。

二月四日、土、立春晴。

朝赤松月船訪問。『出石』書き改めたものを見てもらう。これにて短篇になりし由。帰りに野長瀬をホタルアパートに訪う。昨夜もらって忘れたとちの餅をもらってくる。野長瀬、田中、倉橋、鈴木二郎という人を伴い来る。仙台人なり。ズーズーという。一緒に写真をとって貰う。そこへ竹下君も来てにぎわう。夜、海豹同人会。古谷綱武宅。会費五円。集るもの——大鹿卓、今官一、岩波幸之進、塩月赳、新庄嘉章、吉村○○○、神戸雄一、藤原定、小池○○、太宰治、小生。

野長瀬正夫氏(右)と

二月九日、木、旧正月、晴。

みさをの母よりわかめ、さざえ、うにを送り来る。余はわかめ、さざえ、青のりを持ちて赤松月船、井伏鱒二氏を訪いたり。月船氏今日かぎり「ミリオ」をやめる由。今は天沼二九五にあり。夜道をよく知らねば井伏氏の邸近くまで送りてもらいたり。井伏氏はねていたり。起きて酒などよばれ、さざえのつぼ焼してくいたり。なかなかの通人の話をきかされつつ。氏の部屋に上りしははじめてなり。帰りに野長瀬のところにより、大いにやろうというて夜半をすぎて帰る。春のように土がやわらかになりいたり。妻は今日里のものを持ちて駒村さんに行きたり。

二月十一日、土、紀元節、曇。

又寒くなった。キタナイマントをかぶって朝十時十分新宿駅に行く。倉橋君待っている。市電で上野に出る。途中建国祭の行列にあった。宇野浩二氏を訪いしが留守なり。歩いて浅草に出る。一瀬直行君を訪う。大分丈夫になりたり。腹の切開の傷跡を見せて貰う。大きな蚯蚓がはったようなり。クオータリー「小説」をもらう。帰りに又宇野さんを訪う。又留守の由。女中が格子戸よりのぞいて言う。タカリを恐れて玄関には出でざるなり。新宿のいづみ屋にて酒二、三本のみ、支那そばわんたんを食べて別れた。かえりに土曜会につき古谷君のところへよったが、誰も来て居ず、オジサンなる代議士君と彼は酒をのんでいた。実におっとりした人。金持羨しくなる。マージャンをして十二時前帰宅。伊予レモン、カマボコをもらった。

二月十五日、水、曇。

風はげしく、郊外の空が黄色くそまった。朝竹下君来る。今野君訪問。借りていた雑誌を返す。那須君宅に到りしも不在。借りていた「新潮」一月号返して去る。中谷孝雄氏訪問。はじめてなり。小田嶽夫君不在。蔵原君訪問不

在。塩月君訪問不在。神戸君宅近くにて、藤原、今、太宰に逢う。中谷、蔵原君と帰宅、夕飯を共にし、花三ヵ年なす。十一時すぎ両人退去。道を歩きつつ中谷に「僕『海豹』の末席」だと言ったら「そんなこと言うのはずるい」といった。「名前は『海豹』ときまったのか」ときかれ「そうらしい」といったら、「同人がそんなこと言うのはおかしい」と言った。さむさ大分ひどし。

二月二十一日、火、晴。

朝、日なたぼこしていたら神戸雄一君が、『出石』の校正刷りを持ってやってくる。古谷君の所へ同道して、そこで校正をなす。奥さんと四人で上高田の方を散歩したりして、夕飯をよばれる。大鹿君も来て、古谷を高円寺まで連れて神戸君のところかえる。神戸君は又校正のことで守部と二人で太宰のところへ行ったので、小生たちは雑談して帰る。

夕刊、切抜小林多喜二が警察で殺されたことが出る。二十日赤坂福吉町芸妓屋街で街頭連絡中築地署小林特高課員に追跡され格闘の上取押えられ、築地署に連行された。水谷特高主任取調続行中午後五時突然そう白となり苦悶し始めた。築地病院の前田博士の手当を受け同病院に収容したが心臓マヒで絶命した。東京地方検事局から吉井検事が出張検視しているが、捕縛された当時大格闘を演じ殴り合った点が彼の死を早めたものと見られる。――（附記）二十三日――帝大、慶大、慈大も解剖を拒絶。急死した小林多喜二の遺骸は友人と遺族間に解剖して死因を確めようとする希望があったが拒絶され、やむなく自宅に運び戻った。同夜は杉並区馬橋三の三七五の同家で通夜が行われた。この夜、杉並署は通夜集会を不当と認め、集った人を検束した。花束を抱えて弔問に来た中条百合子も門前で検束され、他十六、七名。結局、母と弟と葬儀委員長江口渙氏のみ三人で通夜。

附記、又二十三日夕刊――。作家小林多喜二氏の告別式は、猛烈に厳重な警戒のうち午後一時から自宅で行われた。自宅入口近くに、全く稀な警戒本部が作られて、三、四十名の正私服が頑張り極く近親しか入れず。……自宅には赤い布に包まれた棺の前に、せい母堂、弟三吾君、ラジオで知って小樽から上京した姉佐藤しま夫妻が子供を抱いて参列。江口渙、佐々木孝丸両氏のみ告別を許されたのみ。

二月二十五日、土、晴。

日光浴少し。体だるし。風邪気味ならんか。いやなり。午後赤松月船氏来訪。この間「海豹通信」に神戸が木山捷平の印象を氏に依頼していたが――その話出て、どうもこれは失敗失礼であったと後悔ものなり。茶も出さず。塩月君訪問不在。神戸君訪問不在。古谷君訪問不在。中央公論三月号よむ。妻、ズボン下毛糸手編。「朝日新聞」付録、ジュネーブ特信。歴史的総会の全容として発表。松岡洋右代表鉄火の熱弁、反対以外に途なし。イーマンス議長勧告書変更せず。賛成四十二票、反対一票、棄権一票、欠席十二ヵ国。日本代表退場。連盟脱退決意。云々――

二月二十七日、月、晴。

古木さん来訪。この間宇野浩二の会があって出席した由。神戸君の夫人が来て「海豹」創刊号が昨夜出来たことを知らせる。同氏宅へとりに行き塩月君にも届ける。雑誌は印刷と表紙が上出来でない。塩月君しきりに不平なり。夜、塩月君と二人で古谷君を訪問。神戸、金子あり。雑誌の出来ばえについて話す。塩月君しきりに不平なので、又小生もあきたらなさがあるのでそれを古谷に忠言す。十二時すぎ帰宅。籟より手紙来る。九日が農大入試なので上京する故、宅までの地図を書いてくれとある。早速書いて出してやる。

三月二日、木、曇。

三月になったのに今日は相当寒い日和である。朝食を一時頃していたら今野が来た。「海豹」にのった『出石』をほめてくれる。連れ立って塩月君訪問。同君『出石』を巻中第一とほめてくれるうれしい。弄花二年あまり。夕方かえる。朝の郵便で太宰から六銭の手紙着いた。『出石』の批評がのっていて随分手きびしくやっつけてある。——彼は小生をまだ子供のように思っているらしい。しかし批評の態度はうれしい。夜、高円寺に出て竹下により、五銭の借金を十銭かえした。五十銭の茶を買ってかえる。女房は今夜もひきつづき毛糸のモモヒキを編んでいた。

三月四日、土、曇。

このごろずっと天気よくなし。(体の神経痛) 夜同人会。新宿エルテル三階。会費五十銭。散歩の途中詩人協会の発会式にのぞんだ縄田、杉浦に出逢う。同人でない中山、森など来り、大鹿君は早引し、今、太宰君は来らず、会は少しも進行しない。今、太宰には紀伊国屋前で出逢い、数人で本郷バーの上で雑談し、作品批評もやり、今度もう一度同人会をやり直そうと決定。その由を古谷と塩月君につたえに行ったが留守。途中帰りにあえて話す。昼、清瀬保二さんの所へ立ちよってリンゴ六つもらった。野長瀬君熱海よりやってくる。

昨三日、三陸沿岸地方の大津波の号外、(一)、(二)と発表された。岩手、宮城、青森三県の被害、惨状刻々発表される。明治二十九年のものと大部分が似通う。

三月七日、火、うすぐもり。

朝割合に早く起きて神戸君の所へ行く。二人で南洋堂に古本四、五冊うり三十銭になる。古谷君訪問。三人で果物を持って井伏鱒二氏を巣鴨(大塚辻町)の福武病院に見舞う。ジン臓で青い顔でねていたが、これでもよくなったのだと。奥さん、河上徹太郎さん、ラン子、中村正常に逢う。初対面。かえりに新宿のアパートに森三千代を訪い(初めて)金子光晴、国木田虎雄氏に逢う。神経痛痛む。今日、古谷君に羽織を借りる。小生のは袖がこの間やけたのである。両手にフキ出ものがいっぱいできた。何であろうか。

皇軍承徳入城の号外出る。輸送承徳—京城—大阪空輸の写真掲載。

三月八日—十二日

熱海行。足の神経痛治療のため思い立って決行。東京で

は雪が一寸ばかりあり。トランク一つ、汽車賃一七九銭也。三時五十五分発、熱海着六時。田原町熱海アパートに向う。野長瀬、杉下富士夫君あり。入浴一回。夜は足が痛んで十分ねむれない程。

九日――入浴三回、(外一回、内二回) 三人で金色夜叉の碑を見る。「みやに似たうしろ姿や春の月」とある。何でもない海岸なり。午すぎ杉下君と万人風呂に入る。大きな風呂に男四、五人。女はいない。

十日――左足の外側いたし。こちらへ来てから暖い日光のあたった日はない。全く天候不順で憂ウツなり。夜、野長瀬、松尾、小川の三人外出。入浴外二回内一回。昼、野長瀬と小川と三人で河原湯に行く。女が数人来ていた。インバイらしい。足の痛み困却かぎりなし。

十二日――朝六時過ぎ風呂に入る。数人の人出入す。アイノコ娘その母など、母同情してエキホス塗ると足の痛みなおると教えてくれた。入浴一時間。午後、みんなで引き上げることにした。小生宿代五円二十銭。十円を出し、野長瀬に二円で汽車切符を買ってもらう。駅まで自動車がないので歩くのが辛い。コウモリ傘の杖にすがって行く。車中もつらし。東京駅ホームの長かったこと、野長瀬おんぶしてくれた。高円寺より宅まで人力車四十銭。二、三日足の痛みに耐えて、家に帰るのをたのしみにしていたのにみさをは留守。雪だれのみぽとぽと落ちていた。裏戸をこじあけて入ると彼女風呂から帰ってきた。一夜中痛みでねむれず転々。

三月十七日、金、晴。

久しぶりの晴天。神経痛大分よろし左側腿外側いたきのみ。

青樹君という二十三歳の青年鷲尾氏の名刺を持参。池袋駅東口の屋台で洋酒うりをなせりと。背の小さき純情な男なり。詩稿をたずさえ来る。塩月君来る。「海豹」のことについて花を咲かす。草野心平、新居格のところへ社の用事にて行きしと立ちよる。一年近くもあわないでいた。美しき洋服など着て颯爽たり。

鑛よりハガキも来らず。どこに来てどこに泊っていることやら。

四月五日、水、小雨曇。

竹下君来訪。身体だるし。久しぶりに蔵原伸二郎訪問。二人で松の木町郊外を散歩した。道傍の草が見ちがえるほど伸びていた。夜銀座キューペルにて「海豹」同人会。市林という人藤原君の紹介にて入る。四月号が今日出来たばかりで合評会できず。今、太宰も来り、古谷君の態度寝ころんだりして不快なり。今君の脱退を議決し、三号の編集をなす。小生の『うけとり』(四月三日稿了のもの)のることとなる。古谷と神戸は新宿にのみに行く。余は塩月、太宰、今、とかえる。古谷は余に「シャクにさわる」「シュウトバア」だと言った。久しぶり灸6×32―138。

四月十日、月、小雨。

『うけとり』清書完了。速達にて送る。鑛九時すぎやってくる。明日より授業始まる。郵便物の中に青樹基嗣君より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c